

平成22年6月7日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20700620  
 研究課題名（和文） 理系研究者のための科学コミュニケーション  
 研究課題名（英文） Science communication for scientists

研究代表者  
 横山 広美 (Yokoyama Hiromi)  
 東京大学・大学院理学系研究科・准教授  
 研究者番号：50401708

研究成果の概要（和文）：理系研究者は、1）予算的危機、2）若手育成、3）社会と論争がある科学テーマについて科学コミュニケーションの意義を感じるが、一方でこうした自ら参加しなければならないニーズがない場合に科学コミュニケーションに参加する意義を見出すのは難しい。理系研究者が、科学コミュニケーションに積極的に関わるには、社会の中における科学の位置づけを議論し動機を持つことが重要だ。

研究成果の概要（英文）：When they discuss a budget crisis, the development of young players, and scientific themes that have disputes with the society, scientific researchers in general believe science communication is meaningful. On the other hand, it is difficult for them to find it meaningful to participate in science communication when there is no such need. It is very important for them to discuss the positioning of science among the society and have a powerful motivation in order to get actively involved in science communication.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育/科学工学・科学教育

キーワード：現代科学史，科学コミュニケーション，研究倫理，ビッグサイエンス，科学リテラシー

## 1. 研究開始当初の背景

科学コミュニケーションの重要性は指摘されていたが、理系研究者がそれを実感を持って認識している状況ではなく、むしろ必要性を感じにくい、あるいは積極的に関わることに消極的な背景があった。2009年11月に事業仕分けがあり、その後、こうした背景が急激に変わった。

## 2. 研究の目的

そこで、視点を理系研究者側に移し、理系研究者にとって参加する意義がある科学コミュニケーションの在り方について調査を行いたいと考えた。

## 3. 研究の方法

主に、研究会の開催で特定のテーマについて議論すること、さらに問題をもつ研究者との議論によって問題を抽出していった。理系研究者自身に話題提供を議論をしていただく「トランス・サイエンス研究会」を2回、理系研究者をサポートするコミュニケーション部門の担当者が集まる国際シンポジウム「日米欧 科学広報の戦略」を1回、開催し、問題を抽出、解決案を議論した。

## 4. 研究成果

理系研究者が科学コミュニケーションのニーズを感じるのは1) 事業仕分けのように予算的な危機に立たされた場合、2) 若手育成の一環として教育的な活動を行う場合、3) トランス・サイエンスのように科学と社会の間で論争になっている問題についてであることが明確になった。動機があって、初めて活動につながるということを、議論を通じて確認した。

これに対して、コミュニケーション担当者は、時事的な要素をとらえて、必ずしも上記の1) から3) にからまずとも、科学の内容を上手に伝える工夫をしている、あるいはメディアとの付き合いをしていることが明らかになった。

すべての理系研究者に科学コミュニケーションを強制するのは現実的ではない。しかし予算額等によっては1) から3) のニーズがなくとも、説明責任として科学コミュニケーションを行っていく必要があることが指摘されている。1) から3) のニーズをもつ研究者に対しては研究コミュニティや組織が体制を整えながら、それ以外の研究者には社会の中での科学者の立ち位置を再確認し、まずは動機を議論することが有益であることがわかった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

(注) 論文ではなく報告書

- ① 横山広美, 「理系大学院生・研究者のための科学コミュニケーション教育」 科学技術コミュニケーション 第5巻 2009, 79-85
- ② 小寺千絵 池内桃子 岩崎 渉 榎戸輝揚 生出秀行 音野瑛俊 佐々木 浩 砂田麻里子 手塚真樹 豊田丈典 永村直佳 浜地貴志 平沢達矢 松尾信一郎 宮武広直 横山広美, 「大学院生による科学者コミュニケーションの可能性と課題: 東大院生有志グループ Oto1 の実践を通して」 科学技術コミュニケーション 第6巻 2009, 69-81

〔学会発表〕(計 3 件)

(注) 国際スクール, 国際シンポジウムを含む

- ① 2009年11月  
Interactions meeting (particle physics communication group), スイス, 招待講演  
"Reaching the Heart of Japanese Public in Science Communication"
- ② 2009年9月 25日~28日  
日本物理学会 2009年秋季大会, 熊本大学「最近の素粒子実験に関連する情報発信について」
- ③ 2009年7月7日  
International School of Scientific Journalism and Communication 2009, エリチェ (イタリア), 招待講演  
"Reaching the Heart of Japanese Public in Science Communication -Science Communication in Japan 2005-2009-"

〔その他〕

ホームページ等  
自身のホームページから常に情報発信を心かけている。

<http://sc.sp.s.u-tokyo.ac.jp/yokoyama/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 広美 (Yokoyama Hiromi)

東京大学・大学院理学系研究科・准教授

研究者番号：50401708